



エネルギーは他の何にも代えがたい普通通貨である。しかし、公平に使われるとは限らない。何よりも低所得社会では、伝統的なバイオマス燃料と生物原動力を基本としながら、化石燃料と電力の割合が増えている。他方、工業化したか脱工業化した高エネルギー諸国は、1人あたりの燃料消費量と電力消費量が飽和状態になるか、そこに近づいている。著者によれば、歴史をエネルギーから時代区分するのは正しくない。確かに、イノベーションが進み、新しい燃料と原動力が広く採用された時代でも、国や地域によって大きな違いがある。エネルギー移行の進化的な性質を無視してはならない。たとえば、役畜と水力と蒸気機関は、

エネルギーの人類史 (上・下)

バーツラフ・シュミル著



原題=ENERGY AND CIVILIZATION
 (塩原通緒訳、青土社・各3200円)
 ▼著者は43年チェコ生まれ。カナダのマニトバ大環境学部名誉教授。

先史から現代へ変遷見渡す

産業化された欧州と北米でも19世紀以上も共存していた。木材の豊富な米国では、石炭が薪を上回り、コークスが木炭より重視されたのは1880年代にすぎない。著者は、新エネルギーについてはいつも神話がつきまると語る。19世紀の著述家は石炭を理想的なエネルギーとしたが、まもなく深刻な大気汚染、土壌破壊、健康被害に気

がつく。その後理想化されたのは電気だったが、貧困と病気を根絶できなかった。しかし、確実なのは今後数世代、今よりずっと多くのエネルギーを必要とすることだ。歴史的に大きな時間枠でエネルギーを考える著者は、大昔から蓄積され転換された燃料を利用する高エネルギー文明は、芝居の幕間だと巧みに表現する。もっとも、化石エネルギー

がいずれ枯渇するという考えをとらない。何故なら、入手できる化石燃料をすべて燃やすと南極の水床がすべて溶けて海面が約58メートル上昇し、世界人口の大半が住んでいる沿岸部が水没するからだ。文明の伝統はそこで止まるだろう。いずれにせよ、人類はこれから数世代もかけて新エネルギーへの移行を模索しなくてはならない。著者のシナリオはどちらやら悲観的である。

人間の宿命は短く情熱的かつ刺激的に浪費して生きることであり、人はあがいて滅びるのではないかと、肝心な点になると他人の言葉を借りるクセがあるにせよ、先史時代から現代までエネルギーの変遷を日本を含めて俯瞰した本である。

《評》武蔵野大学特任教授

山内 昌之

読書